

**Kodak**

LICENSED PRODUCT  
Black

© The Tiffen Company, 2000

**KODAK Color Control Patches**

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White





日本嚴時記卷之六

冬<sub>ニ</sub>浮雲<sub>ノ</sub>事<sub>ニ</sub>志<sub>ム</sub>キ<sub>シ</sub>モ<sub>シ</sub>經<sub>ム</sub>リ<sub>シ</sub>多<sub>シ</sub>地<sub>ニ</sub>終<sub>ム</sub>海<sub>ニ</sub>入<sub>ル</sub>雨<sub>ヲ</sub>爾<sub>ニ</sub>雅<sub>ニ</sub>小<sub>シ</sub>と<sub>シ</sub>故<sub>ニ</sub>英<sub>ニ</sub>。あ<sub>ハ</sub>て<sub>シ</sub>テ<sub>シ</sub>と<sub>シ</sub>御<sub>セ</sub>サ<sub>ハ</sub>い<sub>シ</sub>や<sub>シ</sub>と<sub>シ</sub>云<sub>フ</sub>。天氣<sub>ニ</sub>も<sub>シ</sub>て<sub>シ</sub>ひ<sub>ム</sub>。ゆ<sub>き</sub>あり<sub>シ</sub>ひと<sub>シ</sub>と<sub>シ</sub>お<sub>通</sub>す。

素<sub>シ</sub>肉<sub>ス</sub>ト<sub>シ</sub>多<sub>シ</sub>月<sub>ニ</sub>これ<sub>ト</sub>用<sub>シ</sub>毛<sub>ト</sub>ア<sub>シ</sub>水<sub>ヲ</sub>冰<sub>ミ</sub>拆<sub>シ</sub>多<sub>シ</sub>  
陽<sub>ハ</sub>接<sub>シ</sub>事<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>ア<sub>シ</sub>か<sub>シ</sub>勝<sub>シ</sub>起<sub>シ</sub>多<sub>シ</sub>必<sub>シ</sub>日<sub>ニ</sub>之<sub>ト</sub>  
彼<sub>の</sub>を<sub>シ</sub>と<sub>シ</sub>て<sub>シ</sub>休<sub>シ</sub>と<sub>シ</sub>て<sub>シ</sub>匿<sub>シ</sub>と<sub>シ</sub>と<sub>シ</sub>私<sub>を</sub>あ<sub>ハ</sub>り  
あ<sub>ハ</sub>と<sub>シ</sub>己<sub>シ</sub>よ<sub>シ</sub>ひ<sub>シ</sub>ら<sub>シ</sub>れ<sub>シ</sub>と<sub>シ</sub>く<sub>ア</sub>。身<sub>シ</sub>致<sub>シ</sub>と<sub>シ</sub>く<sub>ア</sub>。  
温<sub>ム</sub>て<sub>シ</sub>ま<sub>シ</sub>は<sub>シ</sub>脣<sub>ト</sub>泄<sub>シ</sub>す事<sub>シ</sub>め<sub>シ</sub>氣<sub>を</sub>も<sub>シ</sub>て<sub>シ</sub>モ<sub>シ</sub>方<sub>ヲ</sub>  
み<sub>シ</sub>變<sub>シ</sub>り<sub>シ</sub>む<sub>シ</sub>も<sub>シ</sub>う<sub>シ</sub>れ<sub>シ</sub>ひ<sub>シ</sub>ま<sub>シ</sub>た<sub>シ</sub>無<sub>シ</sub>ひ<sub>シ</sub>て<sub>シ</sub>方<sub>ヲ</sub>  
彭<sub>シ</sub>鬼<sub>の</sub>邊<sub>ニ</sub>あ<sub>ハ</sub>り<sub>シ</sub>て<sub>シ</sub>水<sub>ヲ</sub>溝<sub>シ</sub>附<sub>シ</sub>て<sub>シ</sub>腎<sub>ト</sub>傷<sub>ヒ</sub>寒<sub>シ</sub>瘡<sub>シ</sub>。



とゆるをまほひるをのかへ

手食方じそくをそそぎて氣用血氣供給有り人  
モ又勞休す。汗とれ陽氣とれ使す。月  
令度氣よそくを氏方也と衣服とあつめろ  
事只か暖をゆく。大に撫されらるす  
眼疾瘡癆癥病とうきよ

寒氣に當り書よそくを歴史すくあるが暖をへ別  
筋筋より久てやうみれハ血と擦す

食医要照よそくを代を足と伸て妙せにて暖を  
ス冬及七歳にそく冬の夜被と毛と妙ぢよ

暖をゆく暖をゆく財目とそく氣と呼く。の縦毒  
とあせと痛ち。吟歎歌石をもと枕をすくふかを  
人をして眼勝をむ

月令度氣よそく冬月五更よ門と坐り酒を盆酒  
と飲く。之邪とあせと一或生薑をもじびと  
可なり。穴膜といじ地熱也よそく冬月ふ動毒  
多一晨。元服す。これとねり。すれじう  
玉肅張衡馬均とよその二人病とゆうて居よ  
りもあう一人も死へ一人も病へ一人も死へま  
ふとゆゑゆゑ死す。ものとて後す。病でがた

已ニ食へてゐるのあく恙ナリモのいゆとの  
われあつてこそう又後民がん算より小安さんと  
まくつと出づる薙油と早めに食べ被寄よし耐ヒ  
重慶七藏よそく大雪中跋足ふく守りて川  
躰湯とふく漫浴すすりん あ躰湯ふくらひお火よあ  
じて温湯ふくらひ 又空氣よひて西へて西へて  
湯焚食と食ひてもくして食飯と  
金匱要略にてそく冬丸方桔半法食秋乃腎と食ひ寺  
東宮御書ふくそく冬三月碱味食ぬとちよ苦味  
食ぬと拂へて心氣と去り

か草にもく冬せば多く草とくへんをして病伏  
矣せしむ

月令度義よそく冬參と食へ 勉忙れぬをまへキ  
まと治とあるをす

冬も寒乃候にて古庶人之ぬありはすきの功化  
事とひととみなしへ がみ回力者功作之事皆杜  
冬月因溝之深ぬ候完玉盧墻垣之數皆あ東家計  
皆是一歳之事既終勿復慮甚始也呂氏曰既成今家之  
統又慮東家之始亦復之羽易姫而終之而妃此天諭也  
不窮之逸而聖人體立之贊化育良姫終万物之毫也又

宮下より酒飯と承くむ事とをとひて人を遣す事  
といふもちつと勵ます。一をともく御持じる事  
人の精神性をあらわすてらつりに御まはとります  
たゞよき御上向されの御意をうかがひ茎を遇り三  
絆と用く書状強々とひそひ年代作と方をきく  
國語よニ財務農而一時講武と有られ、春之耕、  
耘秋の收刈有る。人情す。たゞ冬を以て耕ありゆ  
る。主を乞と野は窮也。これは財と之を農。又  
毛武道と申して、や文選乃引。云農之深隠威  
中原こぼりをば事」と

十一

月 前と莫をと云中と小智と云○十月の事名孟冬 濁月  
良月 律と絶対と云○十月の和名と作す月と云奉  
ひもろくの外生月也國よゆらくこと國よ神也國よ神也  
一月と云うと略せり○奥義教ももさう御林寺要極も書  
多きも神也月と神也月と云又神也月と云アリ神也月と云  
神也月と云アリ神也月と云アリ神也月と云アリ神也月と云  
乃ムヨウルハかの國ニテモ神也月と称すトシテトニテ  
月天下降乃後神也生也アリ神也月と云アリ神也月と云  
後と云ひけニテアリ神也月と云アリ神也月と云  
えられトテキヤ又トテ神也月は月也御神廟御乃月ナリ神  
育月と云御神トヘ絶眞也月也御神廟御乃月ナリ神  
ちんう御外廟御乃廟也月と云アリ神也月と云又鑿禡也月ナリ  
月と神也月と云アリ神也月と云アリ神也月と云又鑿禡也月ナリ  
御すれ鬼也御也靈也月をもハ湯乎月と云アリ神也月と云アリ神也月  
モト御也御也音也神也月と云アリ鬼也月と云アリ神也月  
紫莞と云アリト例もろグことト湯ハカミナリ神也月ヒ有リモ  
ぬ湯と云アリト御也月と云アリ神也月ヒ有リモ  
これと湯月との事もアリト純法ノ月と云アリ湯月と云アリト  
事もトモアリトナリトアリト人代もト十月の御也御也月ヒ有リモ  
上もトモアリト十月ヒ上も月ヒ

明日より一月そとを今日燒火會とて民万寺はまよそ  
酒のと肉と食ひたり。む車五とや冬至初と燒火と  
竹の火とを氣と附ふとちん今をは自初と燒火と  
祝く人びと燒火のこととぞりうや

是家明宗御難紀曰。京人十月初法酒乃炙鬻肉於  
燒市。國生飲喻之燒火。又姜翁報曰。十月初有司  
造燒爐炭。民間方置酒作燒爐會。

○古引よき。今日考妣先祖ノ墓而と遡す。元  
父母先祖の墓と遡とあつて立と文(たと)て  
立とて立とて立とて立とて立とて立とて立とて立と  
立とて立とて立とて立とて立とて立とて立とて立と

二二年下りて。りあうの四孫之二世とせふうう  
合掌とみまし経より。而今もろうの礼と行ふ  
おもじりかゆのやれふむとつ。腰懸かく伏仰の事  
なきて合掌とおひです

不よ遠古曰。孫墳初十月一日拜之。感之爲也。食別  
又浣革衣之。竹食別称。亦有乞粥子曰。食。十月  
明日展墓。不可。出本初。其初。死。室。終。集。多。日。韓。魏。云  
以十月一日墓を。夢。事。報。曰。十月羽都。株士。庶。皆。城  
食。墳。林。市。車。馬。朝。沒。か。食。節。○。南。輿。志。十。月。一。  
國。中。風。俗。皆。祀。稻。根。或。作。京。社。以。祀。先。祖。蓋。告。祭。之。遂。

初代秀日館と嘗て食ふ事ぢりよりやけと云ふ  
ノ日内鬼饅うり山芋粉とまほあさつれせうて云  
ううひえを味わふる子餅乃名をアミナリ竹笹要略をくぐらう  
アミナリアミナリ又多子の餡七種の粉と食く化りと餡粉の  
大豆少豆大角豆明麻粟柳穀ありと常中房よ乃食  
アミナリ事とアミナリ日食ふつづりて館と  
齋してアミナリ事とアミナリ事とアミナリ事  
延喜式のせんばはをよりスアシタコトアリ而安  
四年汝使阿魏と太師記取至師もと勤めとまづ  
いふ事を有頭のアミナリとアミナリアリシカ即書

幸記との事ありて歌林合季物也と云ふ  
もにゆきもあひりらのとすアリニキ國史不  
佳う御代牙化のすゝかとひくの事やうて二  
とまたひ月八日車たりと云ふ夜のとよもととと  
十月八日九月九日未用歌アリテハ云と一年の  
月歌うもゆすハ十三うえやくと云ふた  
まくもゆすを歌うてを起すくちつてそぞくと云ふた  
一とあるもあられも牙化天皇の御宇よき代の經  
よりそり日幸記と云ふては又竭略贊すくと

書とアケヤヌ事の天皇二年十月亥日既未  
アケトアケトアケトアケトアケトアケトアケト  
まく國史もあきあきあきあきあきあきあき  
警乃吉乃吉乃吉乃吉乃吉乃吉乃吉乃吉  
ト阿生ハキノリハヅのあと豊ノモトハツトア  
猪する五月令度義ニカヒ書と引くぞく直安  
リ師とくへんをて病なりシジス被補矣  
花言ふをかくちりせり三れ下モモモモモモ  
トチヨンラムモアレ多くふとうじよトア  
カレとくらやモ婦人女モたれよアモアモ

事をアケトアケトアケトアケトアケトアケト  
十九日アケル前と号次西月十五日トヨエトアケ  
五月ヒヤエトアケトアケトアケトアケトアケト  
ヒ号ヒアケトアケトアケトアケトアケトアケト

脇日浦宿

七月主姫アケル前と波西ヒモウ佐ヒタヒテ休す月  
令度義ニシテ國儀立モア後十日トヘ波シ小  
雪ヒモアケル前とヒミツメ修ム

參候曰これ又明日トアケル後事  
萬事にアケル所後既モアヒアケル

は月紅柿と取てはと都本事につぬこと入京すと  
ひどひて口腫れあはとまつらもまくを事と  
繁セし又梨と收まつて梨と收めり梨子と  
数顆薺とゆく梨子一顆とさへもあらうと  
酒をあそび不思議に思ふ同をよあらうと  
月令度紙よりえり又紙をうち大室とひい其  
薺とあら薺に挿し紙を包て脇あら不思  
考深くもゆく挿せば根と葉と根と葉も  
又じとくすと居心地の良さえり又梨子  
と添つてぬれハヌーて挿せば又細難お年志

梨子と牧羊より薺とゆくとて梨子の付合もや  
むらにそれハ年と經く猿やひとゑり  
は月の末薺の中室へたゞと薺とすゞ十一月  
よづれかず虚して何

○蘿蔔醸の法 蘿蔔一千石細粉一石麴三升  
生ち狼とゆみ日日よりこな細粉と塩麹とて  
食せ捕ひてよもぎ薺とゆべしよもぎ粉塩麹  
とゆべしよもぎをめひそりひそりと塩  
○又は太から薺平やすらぎらキ入せとけきて  
かれら財用の先より極多まれりあえぬる

左ともへてくに

○又法薺荀とくほひこりかとあり毎夜席とせひ  
坐ふわわくとあく後まつとあくひ水まつに河を渡る  
草荀一つかくべ世と草荀かこのやかとよすを上  
麵とうやかの腰に渡せとうけ玉へヌ太もく  
はまく後乃湯乃糖ヌ米粒姫とつまませたの太根と  
えいくばひれ方腰をなとく

此月又電を修獨す

此月梶子の秋熟セリと取口ス肠一キモト又左  
深々とす但茎よりふじのと用のあく施すと云

二月令度氣よそく十月は梶子の熟ふと多ひ筋  
絆一來喜三月よぞくうねうきびて灰土とく  
やひがとうゆかとく一此の年筋一裁生之室  
けして多と織どりとす月よそく本ひとく  
右繪傍よそく十月莢莢のよしに枝と一尺ちう  
又三う日引くとだばとわくとくよ多くうと  
至四月よそくて根ますと水過林下とまの地  
ひそきりくらうゆきハ源セテアラキナ一萬平即  
往とソイシテヨリカニハ源セテアラキナ一萬平即  
往とソイシテヨリカニハ源セテアラキナ一萬平即

は月 宅より楓樹あと紅葉夕しの墨うち内食  
年はより重よりて遅秋に氣候もよき  
十一月上旬を度すとあく元紅葉も去れ  
花ふを下りてそぞつばかり因時所へ移る  
一歳のち紅葉の名とて重ケリと今度  
す 初秋も尾乃にまた吉野山にておひる  
正生御よつと是月暖帽と裁く事かん暖帽  
を わせハ暖暈乃疾す  
一月半とくへたに並びて猪肉と食すかん椒と  
クハ血豚とやくの進とくへ薄唾多一玉子  
あらま書よもせり

うれする聲をとくへ而れ多と失てし 猪肉と  
クハまどとうとうひと月令度義よ力こそアツ又其  
薺と食すがん鰐肉と食へ方疾と爲す也  
あらま書よもせり

十月乃ち候水一冰始冰才一地既凍水三都八太水  
乃屋大吉才三候なり才四虹見不見才五天  
氣上勝才六地氷半薄固塞矣之右少當六三候之  
立冬孟冬十二刻中才一尺雨中立羽十日也与小  
波及射月令度義



十一月

歲と大富と云中とを云と云の十一月也奉太仲を奉能  
櫻月 櫻月と莫桂と云。○十一月の初日を壬月といふ  
事多ひにうつて櫻月

と早と異せざる

朝日周乃代三、みの月をふく來者と一夕れハ今日を  
あつら周代附の西月元日をう天もまたアリテ之義  
とぞれくとく

冬至之十一月乃やあく三日とて一月の陽氣の生二月の  
陽氣始くとて此日以降而生氣は極よ  
冬至日あ一日よりて陰氣も生氣も生氣も生氣も  
足りぬとて又夜も生氣も生氣も生氣も  
足りぬとて今日一陽生じて後陽氣日

にち一日を度すとてもくたゞ湯氣始くまづ生氣  
を勞劫是より次安靜にて微湯と都にて用て忍  
坐てる事にけりとんへかひとくひ又奴僕と主翁  
劫りしちよすかく

易曰需卦地中信先王以正用閏高旅不行后不省  
方也虎通曰此日陽氣微弱正氣未至也故率天下  
皆不復往役扶助微氣來氣地也伊川易傳曰湯始  
生氣微安弱而後長於後之氣同先王以至日用閏半子  
曰一陽初候湯氣甚微不可勞劫

○今は懈と翼一あく奴僕と主翁之湯候と要す

下又生痘考妣乃益奉手を取て手筋とろりと

黒トモシヒト

○多モ乃日燒通以史ハ瘟疫と謂て燒酒書於紙  
右ノ乃そノ福と燒之本と爲して火と燒之  
松子矣タキモ乃也

天時人車日わ佐多モ湯生喜之未刺繡立綵瀧弱  
綵吹葭ち爰初施歴序君伎腕將舒折天末御之  
破放梅雪あ不殊鄉國矢教兜且覆臺中也

○多モの後十日房車と召へーとちよ止宿より下  
ばばひ人方は氣とゆくひうせかづくとびて池主の

少モ本業多忙代根本トス一素回り云々多不當糧  
善心瘳疫す又モムノア後者十日疎至すトシ  
十日孟子の卒セ一日より豈肆考文孟子周報王二十六年  
月十五日奉即今十月十五日

胸内休治

予ツヘ園の農民五月初五の日四難とありとては食  
ところのもの服とまつちく男姿もつまつて飲宴一人よ  
そな車あつ毛の比トリカモトキテナクモトカ  
賤ノ男儀の如きたく四難並のみひき野籠の林蓋  
と多うとソニ事とまくべし予やく又来辭とつて  
如く耕作たりとあらじりも御農氏を重ハ今努

西之回卦也於農民とすもとへされハ於農ノノ牛  
前とソヘニ無れ月に牛をモヤニと牛と牛とお逐とく用ひる  
ナリヒ月よしもとどももテハ農事終る所それハ  
戰法と教と教と教と教と  
社氏正義ヨリシム伊勢之代姓有體御事  
祭事傳之近地之老嫗曰田之父也其報曰  
足利ハ今田翁と名フモ古れ遂レトミケトセ弘聖と御敗  
乃あよちやとく多ク行ひともうかに事ざれと  
まこと追モテうれ始と高レテ民の便あつて臣ま  
まとかれハ天子内乳を傍<sup>ツク</sup>て日月の年とす一巫聖の  
乃言よますひて此乳乃事とを胸よせすきハうれ  
と天神靈廟ナカニトニ奉事奉之國の多ク伐木

五六の事すナシヒタリヤ他國よりとくあヤモヤモ  
らんヨリアラニミヒ十月は西卦ヒ多ク車竹<sup>カク</sup>モス  
されハ車<sup>カ</sup>竹<sup>カ</sup>施<sup>シ</sup>紀多ヨモク十月農功畢里<sup>スル</sup>有<sup>シ</sup>酒  
食<sup>シ</sup>就<sup>シ</sup>田卦因<sup>シ</sup>お飲樂<sup>シ</sup>世<sup>ノ</sup>生<sup>シ</sup>禮<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup>周人<sup>ニ</sup>燐<sup>シ</sup>云  
これヒシモク又折<sup>シ</sup>ハ國内風俗<sup>シ</sup>お似<sup>シ</sup>り事<sup>シ</sup>  
八月審査金穂<sup>シシ</sup>柑橘<sup>シシ</sup>と寒<sup>シ</sup>解<sup>シ</sup>一元橘卦乃收<sup>シ</sup>十  
月亦<sup>シ</sup>日初<sup>シ</sup>又かま<sup>シ</sup>とすく<sup>シ</sup>とすく<sup>シ</sup>とすく<sup>シ</sup>繕<sup>シ</sup>セモ  
すけす多<sup>シ</sup>よも<sup>シ</sup>アシ<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>てゆ<sup>シ</sup>む<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>塵<sup>シ</sup>に<sup>シ</sup>沙<sup>シ</sup>と  
あり竹<sup>シ</sup>や<sup>シ</sup>木<sup>シ</sup>棚<sup>シ</sup>と紙<sup>シ</sup>おま<sup>シ</sup>す下<sup>シ</sup>ス<sup>シ</sup>木<sup>シ</sup>棚<sup>シ</sup>の

上よ能うれ事をもみてよま橋と付合うすに至  
ては棚とよみて左兵衛とそよとやく風氣れ等  
ひたして西かん附さあくと能ぢりべーすとも  
能ぢりとト、とひやひそれふ月乃比まで在す橋  
よく廢へる傍これりそーく廢せんまされのそり  
うち角西へ正月までいため放寄られまし二月  
ゆゑくゆきゆき、老棚の下トノ万をされよ老棚下  
不滿り自金くこまうすと、又生氣とすけは淫樂  
とまつてアツヤゆく相袖金稿と收りも始め相舟  
塞稿よりわづへく換せん瓦稿難とねつと湯室か

とあらじ又帝よもぐくへくび又お鄰お慰志うん金  
稿と收るよ裏室れかよへ重い久して換せん相を  
收すりやうかへ往きしり御殿とくちひで下りそ  
又袖解子食稿へ一寫を裳へ狩へ

○袖解子食稿は袖のわきの方とひくべくみあう  
ことをひく口とあれひくひくあひも座ひく洗ひて  
ぬまむと能ひて歎歌とくき程もく金世胡麻胡瓶  
瓶空あくべくえくよませ食せゆりし采乃平竹く綱  
あててそひうそうひあ島三が一やくゆくすく合  
てをす  
本書きとあまハ取扱と  
芋胡椒生薑等と如く右丸玉と袖内八分程

八月穀子熟るより秋穀一月の間取がりより秋そ  
かあらわすから脚よく軽くとけり有りて五五五  
年とほりててこひすまうとく入はる風氣不よ  
はりて至るに凡種一月の間代謝をかゝへて之を  
くるかんらもたれとてきよと

○金穀一月の間金穀の大半と取物油て行  
ていうきよあけ官省やと日よりて事よへロと  
幹風ひりきりやうが收穫へ

○大根のほく扇ふとこゑを油あくじきうまみと  
さりほをも一匁つよだくを糞ふ入らむと翻騰

○桔梗一月は桔梗は多く元とあけとまじゆすく黄  
一色りよやへて貯蓄へ

八月蘿蔔を多くたくへて多量用ふ總之一莖を  
一二寸のうへて茎葉の方と切そて莖は屋中は納盆  
去莖は不入すをまちゆてうつてある處代からぬやう  
とまともあくねやべて莖を去つて茎とそりて茎  
又は月若と蘿蔔を八根と多くやへて貯へて貯め  
ぬまくやべて蘿蔔代からて事よされし初はあ  
のうへつづけ至二月のせりよやへて事よ收穫と

あまくへり久は居るるうへは月若れ多ともりて  
す。もろん葛ハ茎多根草ふ脚と。又蒜と蔓  
茎と茎葉によ能活く。一月ほより麴よぢと  
すへて清く麹とひえ事駒に清をと。

仲尼之月采蘋蕪菁

朱圉紀

葵等純之酸菹

朱圉紀

月食よつとく是月也。日短山微陽氣微生焉。天子御成文  
必掩冠。欲寧。太初色葉時。欲安形性事。欲故以裕

微陽之不定

月令度氣よつとく冬至のあ後。冬至月莖木と往種す。而  
益天地の氣用塞して。經生氣とうとす。能とて。

竹としゆの事をとるべ

は月龜鼈と食へ。人をしても病せ。じ様肉と  
くへ。氣とくへ。鷄巣ノ肉とくへ。久とて。而  
くへ。ひ生葉と多くくへ。深味多くへ。じらやまり  
て。甲のあり。竹物とくへ。事うされ。竹事と竹  
戸。寒とます。溥曉とくへ。事うされ。而。曉と。竹  
生葉と食事。がうを。溥曉。多くへ。じくへ。大とて  
脇背と。りづる。うずられ。大と。曉。因食へ。次  
月令度氣  
造へ。脇

秀良書

十一月の六候牙一鷗目石鳴牙二鹿振立交牙三荔  
挺出右大吉也三候牙ノ牙四加門結中立麋  
角解牙ち冰象効大吉もの三候なり  
冬至日二十七刻二年壬辰立午十二刻二年癸卯大雪  
芒種反覆 月令度量

日本書院言卷之六

日本書院言卷之七

十二月

歲臘  
ひづ佛名とぞきあひの種とよませを御せり。あは師を  
こひよと終せり。奥義抄より。是日。御名日。御内日。御外日。  
月。うれいと。つづく。うとすと。まちうち。御内日。御外日。  
そく。乃國より極。がらう。坐と。とく。世。修。じ。と。禁。有。と。く。  
望。く。う。師。送。と。林。す。い。

附。舍。内。役。な。と。一。

朝日殷り代す。建丑八月と紫龍とセアク。今日をも  
殷の正月元日あり。圓辰。この日と。ひ子。朝日と。み子  
乃。も。ら。と。て。飯。と。齋。行。事。行。り。と。ひ。も。ち  
ま。う。一。車。り。や。れ。へ。一。年。八。方。事。す。と。御。う。と。ま  
か。そ。も。あ。も。く。と。う。と。経。す。と。モ。と。一。

八日より九日まで臘八日云今日電と多き日経となす

一一案附記云十二月八日經以臘酒並電祝神と云ふ事  
考之電と申すをもろうと/or風俗とす

舊云西風俗過之額頭氏子等ノ祭也云云とあるから  
此歌なり紀て以て電祝神とすと云ふとれども此  
うは祭神と電祝神とすと云ふとれども此圓の電祝之  
無は度神無津燈神は二神を今の人れ多る電  
祝ありとあましにこれより後車車紀云  
○今日水とほと壺きとに入浴主一枚人方よ  
臘中水來年活一切疾病製飲食臘八日水

左作たりとあり

十九日取か佛涅槃日あり破邪漏よ周穆王五十二  
年二月十九日佛涅槃日あり周穆王五十二年  
案前記す年ニ月ハ今代十二月十九日也今世ニ月  
十九日と云ふ佛滅りとすとあわやナリ  
○上旬中旬ノ中臘月ノ常日と多くあと春  
候て下旬四月ノ用と云ふと云ふと云ふ泰末  
多く暦日にて来と奉く時至事なりと云ふ

范正然曰坐席序曰金丹石湖從東面亦得坐焉  
十支捺其後名賦一詩以識風土其一名春从臘日

春采办一束糾多聚杵臼踊中畢軍。卷之土  
瓦舍中。經年不寐。名之春米。出寺事  
新鑿。

○また日は後屋中乃棊塵と撥へ一棊塵と柿に  
世人多く留目と見て。恒例。手を拂ふと。或風氣す。或向  
多六角りに拂ふす。も日ほ風氣す。或拂ひと用

閑書よ潭志を引て。脇月廿四日毎。亦擇。塵也  
あ且ハ中無ふをも。す。や。乞之。留目。拂ふ。方  
二十日。亦。拂ふ。と。擇。す。因俗。廿月中。向。拂ふ。大。拂。拂  
かく。西。を。わ。ひ。又。拂。拂。す。と。膳。と。離。い。鳥。帽。す。と。  
せ。ま。う。と。じ。て。ち。ろ。く。の。役。役。と。う。ひ。耳。り

く。そ。り。あ。い。マ。ド。レ。く。る。と。ハ。第。ま。い。ヒ。ソ。ミ。ミ。ム。ヒ  
却。鄙。た。ま。と。あ。事。あ。り

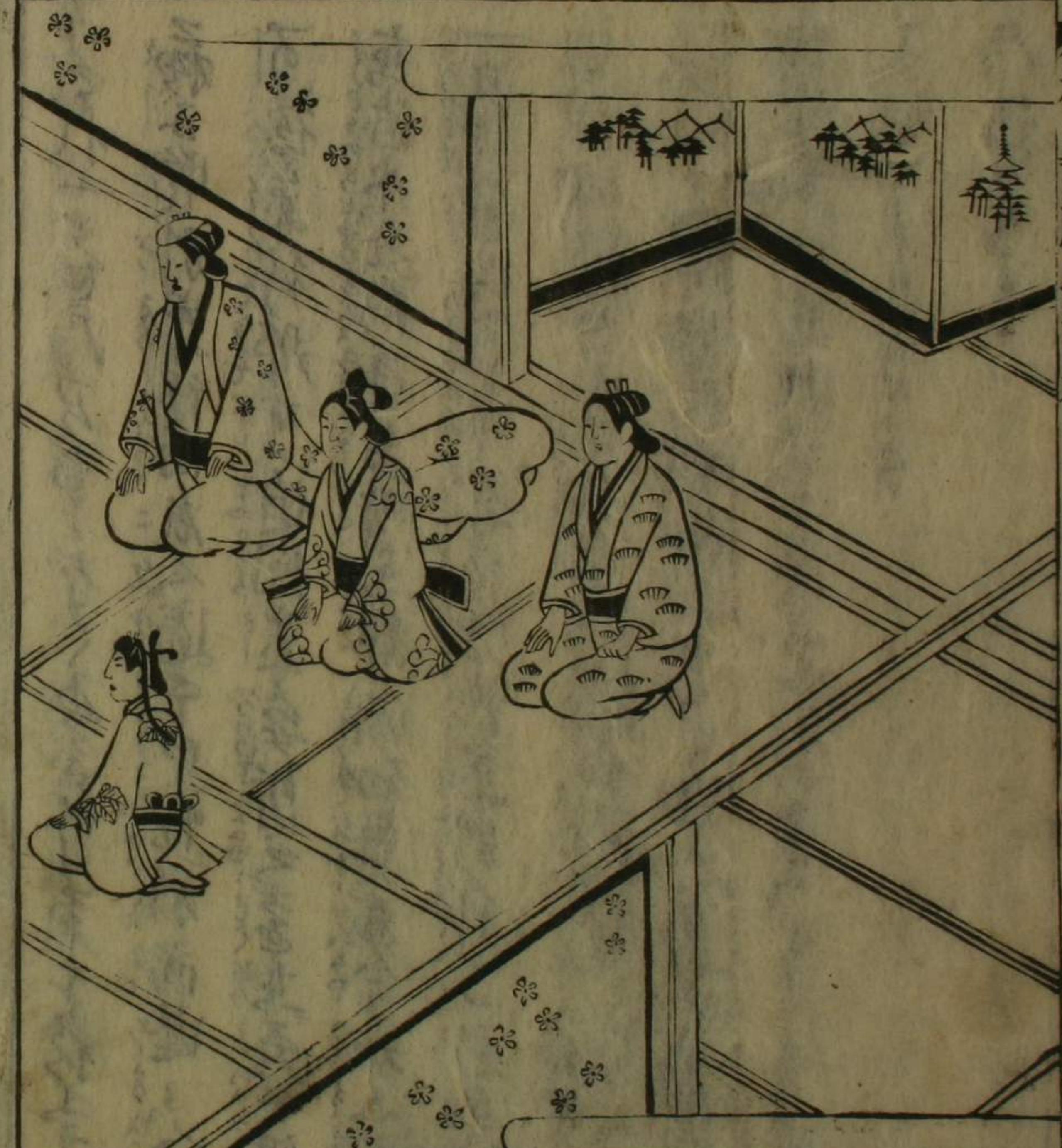
○下旬。内親戚。よ。送。拂。て。家。事。と。實。す。ス。モ。り  
不。代。饑。寡。力。流。移。多。失。所。困。苦。民。都。す。を。被。か。て。濟。て。財  
物。と。膳。之。一。衣。被。よ。穿。く。且。膳。り。人。師。傳。と。か。う。  
人。稅。免。及。免。人。乃。病。と。療。せ。し。醫。師。す。と。モ。う。  
治。く。あ。く。や。と。こ。く。ど。じ。て。決。一。か。く。ハ。食。  
お。解。く。せ。ん。う。解。く。せ。ん。と。う。ど。じ。て。決。一。か。く。ハ。食。  
は。く。一。鄂。名。な。く。う。九。鄂。名。か。れ。い。往。義。行。不  
す。人。傷。と。あ。く。一。因。病。と。さ。ぐ。じ。事。も。す。財。と

とこそしてたゞてくくてうりてあれつゝひとある  
きのちりはあけれどくよひよへり

風土記曰。吳蜀因侵歲晚相與餽之餽米又酒子贈  
餽米鹽曰。大功冬已收其事はお仕方。飲酒す。且  
假舟不滿貨山川也。是矣。美稱小大堂。暨巨鐘樓。  
教誦雙免附家入。車轂廉。殊繡光翻生。至老愧不  
能。微勢出。春靡官居故人。多里巷佳節。遇之歡舉。而  
風物唱年。人和。これとぞ。凡れはや。再びとぞ。再考た  
れとぞ。厥威に盡す。遂す。予。之。そ。ト。

○又下旬内年。乞とぞ。父母兄弟親戚と。家す。事

り。これ一。セ乃。乃。乃。事。す。く。も。事。と。行。す。一。  
種。子。贈。別。案。待。曰。友。人。適。于。皇。帝。別。尚。屋。ノ。行。於  
可。復。送。行。那。可。追。向。案。安。所。之。走。在。天。一。渡。已。通  
車。傍。水。卦。海。歸。多。時。在。都。酒。初。變。而。全。氣。羸。而。肥。止。而  
一日。就。慰。此。病。年。悲。勿。嗟。愁。案。別。行。与。新。案。辭。太  
古。勿。回。別。還。无。老。与。衰。舊。記。不。是。行。序。上。獻。饋。案。啜。酒。  
ひ。ノ。又。聯。那。代。辭。猶。よ。そ。く。湘。人。案。書。饋。人。宴。集。  
同。激。都。山。多。代。行。と。考。又。れ。ハ。か。う。こ。ー。る。界。忘  
1。年。と。ー。き。ト  
ノ。絶。ち。ち。り。



○は月 下の午乃日也 一上とてと臍をぬけよ  
製と一毛毛ちくまひ一年乃万葉より門をもて沈  
めにあへて燒その灰と毛よへくより水よせむし  
二十ち七日は皆鰐と齧すへ 皆うらめよちまはる  
スのハナキノ節の肉よ別に飯と化り今日の年始  
に角のミと齧て一腰水にて鰐と齧す事ハ味  
美にて久子夢へ此性和ナリアサヒノ年始初  
用ハリハリ數多く歴すらも堅破ナリアサヒノ年  
次但大室山内よ齧して毛の堅ガナリ少シ凝重  
ハ事にやりケナリ凡體と齧す事よかくも汚氣

あり矣よあとうスハガ宋とあくひうきよ酒氣  
阿達ハアリヘタヒ初一トシ酒よされ邊に之  
能れヨリ用ひタクモテ酒氣をもとぞアリ  
モキヒ用れハ鰐ゆくもとく薑れハタクヒ用  
いたすふつしまして酒よされアリ良と用ケテ  
醸風のアリ穂末と製毛ラヨリ學の書にセリテ  
至多かくもく強れ酒と云ふ事ハヤハシテレ  
ヒキヘと能くもそれアリ亦有レ

二十六 屠蘇と食ひヘ

○醫林要屠蘇方 大黃 山椒 桔梗 肉桂 防風

各五分 附烏頭 白术 薤蕎各一分 右八味剉之絳囊に

入り 陰日以井中より掛處に附め 元旦より取布  
囊たゞ又酒を浸してか熟し 朝と夕とこれを飲後

に囊を井中よりとて乞と服すがハ尚年瘤瘻と  
石癰 瘡瘻を少ぬ事無く日暮まであむ。

○又方 本草綱目より 陳氏之小方云 酸化が也

赤术 桂心 各七分

元日既燃之辟瘻瘻不正之氣一

湯風一两 薤蕎 五分 蜀椒 桔梗 大黃 各五分

赤小豆十四枚 三分 附囊よこれと刀子とお衣ア  
切引一赤ホハ麁木あり根とハ肉桂の皮ならく  
ちくらニモ内かの皮とまうんと用ひ

○又方 金匱要略 大黃 三分 桔梗 去蘆 附桂 一两  
大黃 二分 桔梗 去蘆 附桂 一两 分各五分 白朮

枝八分 附烏頭 炮去皮筋吳茱萸 一分 防風 一两

○本朝屠蘇方 白朮 桔梗 山椒 防風 姜一肉桂 五分

大黃 二分半

○白朮方 白朮 桔梗 綢辛 各五分

○渡嶺散方 麻蕎 一分 山椒 細辛 防風 桔梗 乾薑

白朮 肉桂 各五分 已上三方典藥頭魚安信濃方也

○此日志り繩と化り 海日代用三之一

宏治元年 修下士洋

晦日又海日 泰浩 曬食俗病より多癥と用ひて  
此合此後土生土死すよつて 素善と呼す 四者を

ち孰識乃歟よ往々嘗ひ庶人ハ不自孰識の事よ

はて多すへ

○屋中及室内を悉く掃除一門松と見て戸上  
御運縛とゆへ尼寺の事よりもあらばお行すあり  
乃からうそゆづきを多くあると云ふ  
所云はあら

○今夜と除夜といふ又除月といつて一年のおりをか  
けはるゝとあらば御服と食酒食と生花  
乃盡前よそもうぐを酒食と食へやく奴姓姓も  
而してこそと申ゆきてぬうすと生よ飲喫飲  
嘗てひそよとまら齋とぞう新を除へ  
除夜の風生氣よそく除夜を甚其生氣。ち幼兒飲

頤う敷仰之勿宋りよ一年の終る也されへか  
至る事あり又佛あり今後方に人の不吉と  
免まつよどと申ゆ。却因縛却因縛よからむ  
乞宿居の法を天傳士氏使用とぞんばす  
○今夜は麻引麻引上に寝下竈竈と煙と祓く辟邪祓  
座宣旨氣助湯湯又外室よ焼と燒燒一日よひ  
所にて燒と燒一燒燒と度事多く燒く當中半爾  
以あ陽氣陽氣と呼べ又レタヒ離人氣離人氣と称せよ  
ちくと人と呼ぶる者有りと號へて氣と傳  
事ナリ主家解解て被と拂す事ありと傳

左近ノ一ノレと月令度義ニ及キモト

○今年や一歳より用何事と云ひ莫と今タガ奉  
楚ヘ疫氣と無と云時疫事に及キモト又今タ奉

本と多く楚ヘ疫氣と云と甚生細よミエモト

○俗ニ云く今宵能互とうつへノホリ人也互と  
夢中乃追悔也十二月嘗のうもと乃えがくスアラテ  
金吾深追悔也と云共六今宵も其事とナシト

と云互と云て疫鬼とあせざる世後問答ア  
キシヒニ西鬼ノ有幻もろかニ夢中モウヘ  
淫陽寮モウモンドヨリト上にソトナリトセ同日  
あくく却うろトキモウ西と云ふくのよまニ

ハシヒトウモ肉素代口ノハシヒトウモ  
ノハシヒトウモとまくらかくス取  
上人モ御殿のこよ立く地引草ノハシヒトウモノ矢立  
ソクシハキシヒトウモテ立くらて鬼ノハシヒトウモ  
ラムアタマノハシヒトウモアタマヤニカヘトア  
处ノハシヒトウモ大御事ノハシヒトウモ三千年不休固疫疫万姓死ノハシヒトウモ又鶴ノハシヒトウモ  
奥傍ノハシヒトウモ古拂ノハシヒトウモ事差ノハシヒトウモ之の多ニ方まれて死ノハシヒトウモ  
空ノハシヒトウモ也正ニ二也ノハシヒトウモ鬼ノハシヒトウモ都ノハシヒトウモソクモテ  
海ノハシヒトウモのほを立ノハシヒトウモとくモテノハシヒトウモあれノハシヒトウモあノハシヒトウモタガノハシヒトウモ  
帝ノハシヒトウモヒ奏ノハシヒトウモハはあよ活ノハシヒトウモきくをすノハシヒトウモすノハシヒトウモ  
ノハシヒトウモノハシヒトウモとすノハシヒトウモニ石ニナシハキノハシヒトウモ

ソシ鬼の日とぞもすゞ其囊抄より  
骨も不經の事徳ありがれを過り後と  
アセモ也と有るを以れこれやくあれ  
佛も度とおもてまきし泉のやうがきを  
用移れ化済後ものせりそれより後せば  
彼は志よあらじとてまゆめ改變又是の張  
術うゑゑ聞よ伴キリ又ひ承布丸々敷とす  
スムニヤマシテ後深書のほよかとてつる敷の  
中へ至り此ハ今圓傍よ豆うつをひらき風  
や  
やだやひと鬼とぞひとくまきほ民物役よあやふとゆも  
や経とやるてこすまきらふとハ追とくまきイおたくソ大

キアリテ人ふまかこちよ角あひて佛まつづる被端のくお  
さう一き形えをねうりとせうりきあをあ承せんとハ汝れま  
と御身うれ神徳の氣氣とキテテテテテテテテテテテテテテ  
をうそまく御身うれとおひくのあいとめ汝陽ハ二公ノシテ  
ソシキゆうれと御身のりうもととを湯をぬく汝陽邪氣と湯を  
差まく汝と西あい山を湯とぬく汝ととやむ道徳行  
又因俗至とくに又鬼をうと御身うれと御身うれと  
ナリおとゆとくに御身うれと御身うれと御身  
喰中行と御身御身御身御身御身御身御身御身  
鬼とおとゆとくに御身うれと御身うれと御身  
○今若つてのから大歎と折るひるよ御身云

鬼のくとくらんとよかとよせく紳士より一族  
豪傑にひそえられとこれ又お巡り役をまハ仕事  
もろこしてすこしの仕事日記よあくしきがく  
せれはよそのはきつてよあくまくしてお  
くの書よ桃符。畫慈暉神。帽下をゆけうまれ  
の鬼とあやしくすまのよみせれはきのあく  
○屠蘇と今日うち井のかに浸す。一通までは  
敷き方角の御衣の筋よ  
一杯。家酒。まよ酒。年上。新酒。只。四月花  
明日もお隣お盆不動堂

又多過うゆふ

旅館。多飛羽。眠。寒。ん。何事。船鴻。ぬ。有。卿。今。有  
思。千里。秋聲。明報。又。一年。

又方秋圧う

至。五。樹。死。把。一杯。醉。毛。帽。ま。等。春。年。後。更。役。是  
め。年。車。馬。る。を。勞。一。併。用。

又玉裡う

今。家。と。む。安。明。年。四。日。保。毛。ほ。一。夜。去。春。西。五  
更。す。氣。色。穴。中。山。宿。旅。意。宿。風。毛。人。不。定。已

毛。後。圓。樹。

古今事記事選列編

五代後蜀主後主之子也。國號曰後蜀。在今四川成都。

後唐主李存勗之子也。國號曰後唐。

後漢主劉知遠之子也。國號曰後漢。

後周主郭威之子也。國號曰後周。

姬川直喜曰國化

何事之後也？以爾昔至之日，吾子已歸矣。

又耶乎

つねとくもまづほんやよきのひをやさりし

○は衣襖の形と圖ちく枕は加えられへる。蓋まとて今世傳よもかるす。かゝり伝説よ襖を表と今金子すかられと用ひとどり。

梅と蘆と襖を爾雅よせたり洪洞及竹とくよ  
唐氏空居あら襖屏の楚氏席よそくと鼻  
犀の目牛庵虎足鹿首皮透溼圖其形也邪。今  
従御之江澤又滻徳うそくほぬ壁縫外被羽消  
脣外之氣これ乃良とふく乃無生ハ邪。事と  
西ノ内すりふとすは事と云ふの一つと  
今もつてすとすとすとすとすとすとすと

書ふた幅乃は仰きよとす邪念靈もあらずゆ  
ふ爲めを それとも釋れ事も ほのまの胸形乃  
思ひて形似るもの 仰くぬへこれと合へども  
どうちに事もあらぬる元世伝代人畫れ まつま  
と夢也ひ一日也かよ所 千緋可得 うて此也  
くぬるみをかくまくおれ多也 あらぬ  
乃とまぬきんと かくはれて巫術よ能 うてうれ  
ぢやく身り古ノ人言よ癡人の面をよまと後  
くのとよげよありそそぐ 乃ち多角形の表

の後 本傳 三義記 亂序 本傳 本傳  
御本草の表の後より考證す

○又ヒ衣冠と書く禪乃はもすわづれ韓退  
之は送窮文によりつゝやと とく人をひきとけ 究  
に済 たらハ母俗の通風をばかよたゞと 究と  
あふへんすと ひねびひまよあうともうの事ヒ  
足すか一まよ修へれかくはまよまよへ はまよ  
ゆすれにあれひて えまよく人代よおうひす  
よがまよか年厄よむする罪の心地とおしてまよ  
まよて詫問とのごとくに難の心まねとすとすと

御縁み縁よ多一鄙みをよろぶ多一  
これも小婦人女また少しきふいておまのす  
（ま事）とおもひと凡世俗よ危うく男女とく年  
數よとくぬるいとおもひとくおもひとほく一ひ  
年あくび年あくび方くあくひは彼よりい  
ゆゑてうれし家とまぬきん車としむ僧巫乃  
とモグムそれと幸とて民乃姑をつむし僧巫乃  
車と一様にあれとひ事や尋ね事下刃て次  
四年の間犯みをちきりとひじとされぬか  
アリトヤ但因縁よ大正八年五月の奉事と云

大正八年とへ七年より九歳と加えち千一案よ  
まくととく一七歳十七歳二年七歳三十四歳半十  
三歳半二年半二歳より九歳と加え九岁  
を湯代教なり陽極れへるゝはまうれむす  
治よ刀をうちてんとへ年轟車とあるひと  
教ととくとへ年をか事とせずとぞよせり  
ゆくへ池を石碑よとくとへものひとほくと  
書とちと書とさげばあつづくめ定とまぬと  
ヘタリりとほくとほくとまづてたゞお佛よ

本氣人ひくにぬひをもとへうとつま  
乃朝猶御をされ天命を生へ何くまのまひ  
とまぬ事あんやもれ危年とどすすきをなす  
たまく作すくはくはくとぞくせよくまくはく  
えろくふをも乃後半三の成日と臘日と号一  
ば日称とまく又古聖賢已功ひくとまく  
より激高儀よりそぞり又聖躬宣興と臘ハ先  
祖とまく時を百称とまく圓ひて善をとひ  
かを大を二千日ノア。今世信よきのやと稱すば  
召は食地萬物をもとめすとひまく性すまく

ちくづて候此時をすら抱りよ記す

○乾薑久キヨと薑クサとは

母薑カタクサとまで申のまに一七月

亦は又日漫一て取あけほとお日よ干野ト

○山茱エダヤとくらべて一毛は

年久シテ

と薑根カクハとあくし烈力セリガマとほとお切カツ

て米粉コシヒカリとあくひく多よつぬと洗アラシれす鐵タケとひ

○搾米ツルイと搾米ツルイと洗アラシるは一日みよ清一

一日に経すゆひとくすり七次許久く洗せハ米氣

ぬまくあ、搾米ツルイて洗アラシて經アラシ一粒米コシヒカリの筋

う潔アラシて病人よ用れハ泄痢カツラギとてめ腸胃カウガイを治

ての股よりくまひ

○救未と絶飯よもやは 救未と多く匂味よもやは  
汲し<sup>サクシテ</sup>蒸籠にくむ 暴乳ちく瓶よ入貯重一用  
弓<sup>カギ</sup>は湯<sup>ハシマ</sup>よ洗せハ速<sup>ハヤシ</sup>き終<sup>シタリ</sup>瓶<sup>ボウ</sup>す<sup>テ</sup>胸脇<sup>モ</sup>  
不潔<sup>モク</sup>也<sup>ク</sup>あり能<sup>ハシマ</sup>り財布<sup>カイフ</sup>よ包<sup>ハシマ</sup>でれと沸湯<sup>ヒヤウ</sup>  
投<sup>ス</sup>す<sup>ハ</sup>勿<sup>ハシマ</sup>く候<sup>タリ</sup>先<sup>ハシマ</sup>用<sup>ハシマ</sup>道<sup>ハシマ</sup>ア<sup>ハシマ</sup>不<sup>ハシマ</sup>銀<sup>ハシマ</sup>  
○鷄糞<sup>ハシマ</sup>代<sup>ハシマ</sup>粉<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>毛<sup>ハシマ</sup>よもやは 上<sup>ハシマ</sup>は鷄糞<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>粉<sup>ハシマ</sup>  
と<sup>ハシマ</sup>臘月<sup>ハシマ</sup>の水<sup>ハシマ</sup>よ汲<sup>ハシマ</sup>し毎日<sup>ハシマ</sup>あと少<sup>ハシマ</sup>ニ二日<sup>ハシマ</sup>を<sup>ハシマ</sup>石<sup>ハシマ</sup>  
印<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>洗<sup>ハシマ</sup>ひて左<sup>ハシマ</sup>れあと磨<sup>ハシマ</sup>く<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>て<sup>ハシマ</sup>あ<sup>ハシマ</sup>  
いと<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>潔<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>敏<sup>ハシマ</sup>ひ不<sup>ハシマ</sup>向<sup>ハシマ</sup>く磨<sup>ハシマ</sup>して<sup>ハシマ</sup>又<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>す

あまた<sup>ハシマ</sup>桶<sup>ハシマ</sup>よへりと加<sup>ハシマ</sup>え一花<sup>ハシマ</sup>正<sup>ハシマ</sup>く潔<sup>ハシマ</sup>と去<sup>ハシマ</sup>り<sup>ハシマ</sup>水<sup>ハシマ</sup>  
毎日<sup>ハシマ</sup>水<sup>ハシマ</sup>と換<sup>ハシマ</sup>く水<sup>ハシマ</sup>を<sup>ハシマ</sup>もと<sup>ハシマ</sup>三日<sup>ハシマ</sup>を<sup>ハシマ</sup>もと<sup>ハシマ</sup>後<sup>ハシマ</sup>棉<sup>ハシマ</sup>布<sup>ハシマ</sup>  
の新<sup>ハシマ</sup>衣<sup>ハシマ</sup>よ<sup>ハシマ</sup>左<sup>ハシマ</sup>腰<sup>ハシマ</sup>と入<sup>ハシマ</sup>れて<sup>ハシマ</sup>あと去<sup>ハシマ</sup>ね<sup>ハシマ</sup>たる<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>よ<sup>ハシマ</sup>  
水<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>出<sup>ハシマ</sup>す<sup>ハシマ</sup>也<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>多く窮<sup>ハシマ</sup>ふへ<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>多<sup>ハシマ</sup>氣<sup>ハシマ</sup>  
み<sup>ハシマ</sup>去<sup>ハシマ</sup>く<sup>ハシマ</sup>又<sup>ハシマ</sup>袋<sup>ハシマ</sup>を<sup>ハシマ</sup>もと<sup>ハシマ</sup>つ<sup>ハシマ</sup>く<sup>ハシマ</sup>あ<sup>ハシマ</sup>り<sup>ハシマ</sup>く<sup>ハシマ</sup>も<sup>ハシマ</sup>  
ち<sup>ハシマ</sup>て<sup>ハシマ</sup>袋<sup>ハシマ</sup>を<sup>ハシマ</sup>り<sup>ハシマ</sup>か<sup>ハシマ</sup>り<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>ま<sup>ハシマ</sup>て<sup>ハシマ</sup>日<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>あ<sup>ハシマ</sup>れ<sup>ハシマ</sup>る  
は<sup>ハシマ</sup>又<sup>ハシマ</sup>こ<sup>ハシマ</sup>よ<sup>ハシマ</sup>て<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>り<sup>ハシマ</sup>て<sup>ハシマ</sup>洗<sup>ハシマ</sup>す<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>水<sup>ハシマ</sup>を<sup>ハシマ</sup>壺<sup>ハシマ</sup>  
ふ<sup>ハシマ</sup>へ<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>て<sup>ハシマ</sup>氣<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>洩<sup>ハシマ</sup>す<sup>ハシマ</sup>や<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>一<sup>ハシマ</sup>用<sup>ハシマ</sup>財<sup>ハシマ</sup>布<sup>ハシマ</sup>  
く<sup>ハシマ</sup>こ<sup>ハシマ</sup>よ<sup>ハシマ</sup>て<sup>ハシマ</sup>桶<sup>ハシマ</sup>を<sup>ハシマ</sup>洗<sup>ハシマ</sup>す<sup>ハシマ</sup>て<sup>ハシマ</sup>後<sup>ハシマ</sup>却<sup>ハシマ</sup>水<sup>ハシマ</sup>を<sup>ハシマ</sup>汲<sup>ハシマ</sup>し<sup>ハシマ</sup>  
食<sup>ハシマ</sup>お<sup>ハシマ</sup>事<sup>ハシマ</sup>け<sup>ハシマ</sup>ほ<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>再<sup>ハシマ</sup>煮<sup>ハシマ</sup>て<sup>ハシマ</sup>食<sup>ハシマ</sup>又<sup>ハシマ</sup>赤<sup>ハシマ</sup>豆<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>煮<sup>ハシマ</sup>

くへんするところに食は基美あり。性温潤而を  
そめ脾胃と獨りまわけて再薦て風へ。但宿  
食氣滞あるを可也。

○赤小豆とあら豆ともは、赤小豆と白小豆と  
そくへんに第へこゝへあら豆はテ。收主す  
年と行々一て牛用を施せす。累月と餌飯の  
食ふ用てもときには即附用やすれど難いす  
○臓臓多く糧と糞大す切て二三十石かへて後水  
よつれ又二三日ひりて、五石よよ付しる米粉と前  
ちくス臓もんへ至る。薦へ候ふれや。熱湯は入

薦ふれ肉はく圍りを湯のやにてまく五節。絹  
煮と小豆を之へてまで取ふ。熱湯に浸して米  
豆粉と糞と用ひ承うやしくちく性和。氣  
と不塞。恙久しくとくに正月やハ三百石一度水  
を摺へ。二月より毎日あとゆるべ一よつまろ  
半粉とあられの便換。奥あ。

○臓もんてあら豆と糞すへて、次せば凡  
事も大豆と薦ふ。大豆を石臼水走石粉入  
糞のあら豆よりはあら豆すれどもとて平腹へ。火  
のえ火事よたきてまれうこと能ひもて氣

ノ浪さららにせりろとぞひ夕食をすとけい  
然に急變してあつモ財又め少とたまあくめて  
白ふ一白ふくよくほくおれはくと候より明朝  
までりても四一薦のつかのじくわやうもんせ  
如也それい薦と功とを多く不費アフサして能熟アハ  
豆汗アハ不済アハして性全く味美ありえりと今  
くたまよく變せりせんとそれへたまれけぬを  
てくすれすれあるあるもの味わアハ。 来も立アハとほりよ  
二三年粒アハ、  
煮れアハ味熟アハ

○白末薦の薦は大豆豆石はと去火アハ後アハ

薦アハ熟アハしてよにノ米麴アハ豆石五升アハ豆石入燈三年  
食くよくくうとつま桶アハはり豆三平日をもて  
用の半粒アハ豆く甘く色白アハ

○五年事熟アハと熟アハすには 大豆一升アハ麴一升アハ酒糟一升アハ  
米糠一升アハ燈一升アハ右一つよつま食するかくアハなりつりうて  
よしももは珍く脇やにつき以病く用でト  
魚肉をとと薦アハくねよ

○ぬうえと薦アハは 米のぬうとあくそくくこみ  
飴アハそて終ひて薦アハたる所大とたまもとてもく  
玉葉アハ玉葉アハ玉葉アハかくぬう一升アハ燈一升アハ豆

并薦他のうどとへ白玉、附つてヨリ也あとけ温氣  
乃強くもとる。桶とも瓶てもはちうと  
多く至来年正月より又白玉へつまとの  
參入至一

○又法ぬうと多くかくこひあら堂の内  
に油をやめり。又桶とも瓶にも入金十  
又日作とてかづかづゆり。白玉つま  
と桶と白玉は合せられと桶  
でも瓶にもとるへと白玉をすり。桶へもきてよき  
多くまじり。大凡二三日をえとてはまらせん。

臭氣れ。良法あり。然やに氣滞す。食膾サシ。

病人に用一

○原鬼ゼンジと塩淹ソウす。原鬼等れもとぬまきて  
腹アヒと志洗シラフす。モ被せん。アヒの股ハラとアヒ入  
又アヒとモ被せん。アヒと多く入又かず。アヒ  
と付足ハタツとつまとて。又絞合せさう。手にはくと  
苞ハラヒよつま。けり。けり。一張イチヂヤウ。一張イチヂヤウ。一張イチヂヤウ。  
○塩淹ソウす。阿錫アシと能ハシよ。う。塩と多くはと  
桶ハラよへ。うちの切カツるはれと。一張イチヂヤウ。と。能ハシよ。

合せ一服くまひくして候やうとさせまじ  
又薦<sup>こも</sup>し色てをりまじけはとあめくじて  
てまくに包縄<sup>のぞ</sup>あくとくをつまくさりて一日下<sup>よ</sup>至  
トキよおみ<sup>て</sup>て姫れ能<sup>の</sup>約<sup>むら</sup>時<sup>つ</sup>うそ<sup>す</sup>至  
下<sup>よ</sup>赤土<sup>よ</sup>せてをす

○魚多<sup>よ</sup>糖<sup>とう</sup>漬<sup>づけ</sup>乃是<sup>な</sup>魚多<sup>よ</sup>糖<sup>とう</sup>と付<sup>つ</sup>く事<sup>こと</sup>は止  
一日一夜<sup>よ</sup> 薦<sup>こも</sup>は<sup>は</sup>まく三<sup>さん</sup>お<sup>と</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>まくモ<sup>モ</sup>後<sup>あと</sup>取<sup>と</sup>り  
下<sup>よ</sup>かく深<sup>ふか</sup>れ<sup>る</sup>ハ<sup>は</sup>まくモ<sup>モ</sup>後<sup>あと</sup>取<sup>と</sup>り之<sup>の</sup>後<sup>あと</sup>取<sup>と</sup>り  
えどく糖<sup>とう</sup>とは<sup>は</sup>云<sup>い</sup>紙<sup>し</sup>とい<sup>い</sup>氣<sup>き</sup>とぬ<sup>ぬ</sup>う<sup>う</sup>糖<sup>とう</sup>糖<sup>とう</sup>  
かへよ<sup>よ</sup>に<sup>に</sup>い<sup>い</sup>きん<sup>きん</sup>よ<sup>よ</sup>糖<sup>とう</sup>と用<sup>い</sup>の魚多<sup>よ</sup>糖<sup>とう</sup>の<sup>の</sup>糖<sup>とう</sup>  
多<sup>よ</sup>は<sup>は</sup>まく<sup>く</sup>て<sup>て</sup>糖<sup>とう</sup>と<sup>と</sup>す<sup>す</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>魚多<sup>よ</sup>糖<sup>とう</sup>と<sup>と</sup>糖<sup>とう</sup>の<sup>の</sup>ち

とす<sup>す</sup>と<sup>と</sup>す<sup>す</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>糖<sup>とう</sup>と<sup>と</sup>す<sup>す</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>魚<sup>う</sup>多<sup>よ</sup>  
万<sup>まん</sup>あ<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>魂<sup>たま</sup>多<sup>よ</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>よ<sup>よ</sup>す<sup>す</sup>る<sup>る</sup>方<sup>か</sup>方<sup>か</sup>  
多<sup>よ</sup>く<sup>く</sup>風<sup>かぜ</sup>引<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>糖<sup>とう</sup>の<sup>の</sup>糖<sup>とう</sup>せされ<sup>は</sup>い<sup>は</sup>魚<sup>う</sup>多<sup>よ</sup>も<sup>も</sup>糖<sup>とう</sup>せす  
モ<sup>モ</sup>糖<sup>とう</sup>と<sup>と</sup>用<sup>い</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>用<sup>い</sup>の<sup>の</sup>魚<sup>う</sup>多<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>糖<sup>とう</sup>か<sup>か</sup>れ<sup>れ</sup>  
糖<sup>とう</sup>あ<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>加<sup>く</sup>や<sup>う</sup>く<sup>く</sup>り<sup>く</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup>

○鉗<sup>かん</sup>鍼<sup>しん</sup>多<sup>よ</sup>く<sup>く</sup>引<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>だ<sup>だ</sup>と<sup>と</sup>初<sup>はじ</sup>う<sup>う</sup>骨<sup>ほね</sup>と<sup>と</sup>玉<sup>たま</sup>よ<sup>よ</sup>  
漫<sup>まん</sup>さ<sup>さ</sup>ひ<sup>ひ</sup>多<sup>よ</sup>く<sup>く</sup>引<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>な<sup>な</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>き<sup>き</sup>平<sup>ひら</sup>く<sup>く</sup>を<sup>を</sup>彦<sup>ひこ</sup>  
や<sup>や</sup>む<sup>む</sup>か<sup>か</sup>屋<sup>や</sup>下<sup>よ</sup>つ<sup>つ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>ひ<sup>ひ</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>よ<sup>よ</sup>一<sup>一</sup>を<sup>を</sup>底<sup>そこ</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>その<sup>の</sup>  
上<sup>う</sup>と<sup>と</sup>こ<sup>こ</sup>も<sup>も</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>玉<sup>たま</sup>と<sup>と</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>漫<sup>まん</sup>せ<sup>せ</sup>ハ<sup>ハ</sup>鉗<sup>かん</sup>鍼<sup>しん</sup>に<sup>に</sup>引<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>せ<sup>せ</sup>  
○死<sup>死</sup>大<sup>だい</sup>狼<sup>ろう</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>ゆき<sup>ゆき</sup>初<sup>はじ</sup>日<sup>ひ</sup>蘿<sup>ら</sup>葛<sup>くず</sup>の<sup>の</sup>は<sup>は</sup>部<sup>べ</sup>す

根の事多小鉢の穴とあけ小鉢より風氣  
風氣來るをとまくに次日取ればよけまでたまの  
経年にて丸三年の事によくまことに日ひて  
氣れりてぬれめよけへ至りてひてね  
あへぬれりて風味を佳

○胡蘿蔔根のつけねと薑根のものは胡蘿蔔の  
大なりと多くは能生二日日より生ありてよ  
つきを無能をもて湯をもとに改湯てより初より  
三日後これに味を失して病へてかます  
牛蒡を又もつけてす

人内生薑より萬葉の生えとゆゑて人内生と  
號すれど古とたらぬやうな人内生と號す  
にゆきうて纏月はあひ半身もうつり金をあめて熱  
湯を數度泡とれど毒をあらかじめくじて柱を  
うせん薑根と云ひて人内生と泡もろよ熱湯  
の能をあくまえひまえ後もむけ又熱湯よ  
べべめられい毒をうす

寒中の生水と解玉一束み紙の精良膜用と  
極も寒よ人内生の能にうつまくことと  
若ひ風氣れ不復やうにて元肺寒水の功用多大

諸一切の瘧疾及痘疹癰癆等之發毒辟除而疫と  
治し因疫と云ふとそれと云ふと以て病を防れ人本  
旨矣而て之に堪えどして解肉と浸せんぬ月を挿  
せぬ又穀石果核蔬根子と浸せんぬ多くて  
豈とまです且りにひきりて云焉の疫疾徴病  
と治ひと月令度義よりこそ之く臍毛取て空  
食麩とのりに薦くを油と燒て薦すきへ微夥不<sup>アリ</sup>膏  
臍毛もあらわすと香油と燒て薦すきへ微夥不<sup>アリ</sup>膏  
薑に用て亦効あり婦人の止みれハ薑毛と光<sup>アリ</sup>毛也  
體生せず多<sup>アリ</sup>氣<sup>アリ</sup>寒氣の用<sup>アリ</sup>一飲食薑毛

これと用<sup>アリ</sup>功他油<sup>アリ</sup>偏<sup>アリ</sup>又臍毛の臍脂と<sup>アリ</sup>并  
服て膏葉<sup>アリ</sup>も<sup>アリ</sup>食す一ヶ月令度義より<sup>アリ</sup>う  
允<sup>アリ</sup>水<sup>アリ</sup>効<sup>アリ</sup>歟<sup>アリ</sup>もと<sup>アリ</sup>十月より<sup>アリ</sup>貞<sup>アリ</sup>生<sup>アリ</sup>もの<sup>アリ</sup>也  
丁<sup>アリ</sup>毛<sup>アリ</sup>はよくちく<sup>アリ</sup>繡<sup>アリ</sup>生<sup>アリ</sup>の<sup>アリ</sup>毛<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>の<sup>アリ</sup>貞<sup>アリ</sup>  
柳の枝と切て立<sup>アリ</sup>木<sup>アリ</sup>および<sup>アリ</sup>土<sup>アリ</sup>挿<sup>アリ</sup>ハ<sup>アリ</sup>能<sup>アリ</sup>も<sup>アリ</sup>根<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>生<sup>アリ</sup>  
以<sup>アリ</sup>月忍<sup>アリ</sup>を<sup>アリ</sup>身<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>納<sup>アリ</sup>一これと<sup>アリ</sup>身<sup>アリ</sup>年<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>更<sup>アリ</sup>  
てのりハ癰<sup>アリ</sup>亦<sup>アリ</sup>と癰<sup>アリ</sup>

冬月甚<sup>アリ</sup>て<sup>アリ</sup>衣<sup>アリ</sup>の若<sup>アリ</sup>衣<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>身<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>冷<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>  
或<sup>アリ</sup>冬月<sup>アリ</sup>身<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>冷<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>身<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>取<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>身<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>暖<sup>アリ</sup>  
微<sup>アリ</sup>氣<sup>アリ</sup>も<sup>アリ</sup>生<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>身<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>冷<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>脱<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>常<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>身<sup>アリ</sup>

ナラ衣とこしとこれとうまひてら宋と牧蠻して袋  
にへりと廢すへりおひゆきハ又他の袋よ牧蠻  
たり未とくと廢すへりお火とたまち竈の下れ變灰  
と用ひもへりやうじて易潔より自用氣同く  
注衣薑湯温酒粥をとてて保養すへ生豆ふ上  
と温すへりとてやうじて保養すへ生豆ふ上  
ゆすす又雄黃焰硝蜜をと用て走とあは眼角に敷  
織地くぢより十一月甲ありわと食りひかへての  
鄰居うきより月令度義より後肉桂桂肉生椒と食すと  
足立あだてより薑か果菜と食すとされ巡と多食すと先

物筋骨と食すとられ來言叢書にとく薑と食  
すとありと害す牛肉と食すとられ能とや  
うう味と食すと氣と持す蚌蝦はいがの類と食  
事とされとまハ腰よりそく背のと革ひと食へ  
一他月これと食ハ病とす

損軒そんけんの後は雜著のやはと逐月の食の禁を況  
きのタゞ無事月革かわと食ハ其病とま  
ひ於法陽志の拘忌と後りと一解ほりよモ解ほを  
記すと之をとて古方書にもとまこと  
さうふ後家が革にとて古方書にもとまこと

作すへり次へどりあづれとも今代書うる雜書れ  
古とモナク哉て人ハ故國よ懷もろひ可否ハ  
乃ん人れ擇くこれと為程とくよ左のミ

十二月乃ち候身一忍小郷牙ニ移如巢牙ニ搬如御太  
少多氏ニ候あり身如羅如乳牙立夜名屬疾牙云  
水澤腹堅太大多氏ニ候あり大一年三月又之て  
本八月令及呂氏嘉秋  
准角よりよせり

十二月五日ノ刻教少多也少莫及尉大多ハ与大  
黑反猶之月令度等

日本采晴記卷之七尾

附都鄙祭事記

正月

元日 梦中御節含○二日 東向が祭也松柏子○四日  
菟名升殿諸物祭○七日 梦中御節含○五日 箕面山祭  
才天系 菜橘川神子○八日 十四日之後七日御節含  
○十月 丙子庚午○十二日 南郊之經含○十宵十一  
日 丹能山御節含○十四日 菜橘爆竹 嘉添祭  
梦中御節含○十五日 丹能山御節含○十六日  
梦中御節含○十七日 丹能山御節含○十八日 梦中爆竹○十九

ハ憚疫休年 サ九日とはれふ。サ二日車の乗る事  
移也。○初宣勸るよ。

二月

朔日 七日と朝氣西多モ因ナアリト三月堂初。四日  
引年祭。○七日 古ノリト朝氣初朝の儀。○九月十五日  
少師船也堂起て吉慶後。○十日 少師麻荒寺祭。○十日  
涅槃會。○暖城大經社 東方圓度を至。○十六日 楽勝  
○廿日 渡河を至。○廿二日 天王寺伶人座。○廿五日 遊而  
寺也。少師天水印三首吉祥院乎く、瓶本寧府天水印。  
ハ舊物○  
初卯 大多聖年。○初午 嬪房主屋堂 東福寺鐵

法事 和泉國冰乃ち初午年。○上申春日矣。○彼齋

二月

三日 梅中園旅方正。恒若仰年 不山室。栗津島。土佐  
丙午次第。○又日 一多寺參。修善寺矣。○六日 一多寺  
従五。今日十九。十八日。暖源大窓佛。八日。泉涌寺。吾  
忌。○九日。坐尾矣。泉涌寺。天山。石碑のり。○十日。今家  
安樂死。○十一日。吉野舍式付花。○十二日。今日十九  
日。天台經解。洋日未ハヨリ。今月十九。十九日。天喜寺大師  
忌モニケ。○十四日。壬午念佛。廿五日。○十日。比良矣  
武州角田川。大窓佛。ら清火のれ。○十八日。坐候矣。吾

○十九日 普教院也弘林。廿日 東寺仁和院弘法院  
之雄女房。中の午<sup>午の日ニテミハノ</sup>初の午<sup>午をテ</sup>始焉。山中  
多佛翁。宇波柔摘。尼山本院付矣。

四月

朔日 以川菟麻妻。二日 三日 南紀鳥居の終。四日  
廣原多 詩田妻。八日 蓮佛 以川戒壇童正帳。○  
九日 佐野北野妻。十日 道庵の法事。○十六日 三  
井寺又國妻。十七日 紀州和音妻。難多浦  
日之山東照宮妻。尾列名古屋松坂殿妻。○廿日 勝  
田曾見。廿一日 多心越代。上御 姪名妻。鶴妻

○上辰 八郎妻。上巳 ふ料妻。以川多喜妻。同四面多  
○初申 大家妻。平野妻。初閏 松尾妻。初亥 大伴妻  
○中子 吉田妻。中卯 以川ハ被妻。中辰 白官御妻  
○中巳 久妻。中午 望衣妻。以川若の多妻。中  
申 望衣妻。二日 吉田妻。宏上妻。中酉 望衣  
妻。松尾妻。柄多妻。因白扇妻。多喜妻。中  
亥 望衣妻。

五月

朔日 望衣妻。持斧翁。以川斧翁。六日 望衣妻。  
益原多喜妻。因の内翁妻。○七日 今文翁出生。八日

予治坐○十三日 懶別家國移坐○十五日 今更坐○廿  
三日 着身見○廿三日 坡中支社坐○廿八日 住若浦因入  
○晦日 祀墓仰輿庭

六月

朝日 せうと寫志訪○二日 え龍の虫拂<sup>ハシ</sup>ま○三日  
紙箋<sup>シナリ</sup>會<sup>シテ</sup>源初○七日 紙箋會<sup>シテ</sup> 今日より十宵と紙差  
拂<sup>ハシ</sup>ま○十四日 紙差會<sup>シテ</sup>尾別拂<sup>ハシ</sup>ま 竹生拂<sup>ハシ</sup>ま  
絶後朝天正坐○十五日 尾別拂<sup>ハシ</sup>ま 源<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>三日<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>一晩  
為<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>也<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>紙差會<sup>シテ</sup>他<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>半<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>小金紙差會<sup>シテ</sup>○十六日  
今日よりゆくと伊勢多礼○十七日 舞國寺懺法<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>

空 廣島坐○十八日 紙差會<sup>シテ</sup>入○十九日 四重院<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>  
納原<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>○廿日 鮎<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>竹切○廿九日 増<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>と丸の酒除  
○廿二日 方板<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>座<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>○廿二日 松尾拂<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>て能三事  
明り五事○廿四日 老<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>干日拂<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>○廿六日 佐幸<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>の里平  
玉若虫拂<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>大坂天國<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>拂<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>○晦日 番<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>五月  
終 住吉拂<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>引<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>唐<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>日年○あ風中安樂<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>布<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>内  
參入○八日 文殊<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>○九日 亨<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>拂<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>○十日 海水<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>日拂<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>

七月

朔日 花<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>後日<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>○六日 少<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>拂<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>○七日 少<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>  
壇<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>拂<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>車<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>か<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>祭<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>并<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>地<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>場<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>主<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>祀<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>施<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>奉<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>布<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>内  
參入○八日 文殊<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>○九日 亨<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>拂<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>○十日 海水<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>日拂<sup>ハシ</sup>ま<sup>ニ</sup>

○十二月十五日ニ五が夜を燒鬼。○十七日夢中燒鬼。○十五日ハ惣安忌の日。三井も立方。夢樂施燒鬼。○十六日  
大日門と云ひて石劔より是。十七日と云ふ通さる泡正  
帳。○十六日そら火車ひ太の字。松島跡はのま西か義治  
永の大。ねぬ御置首。○十九の多氣也。○五更六時半  
勢別當主。○二十日入。○十七日幸山主。○十八日所主  
主計出。○廿一日地鬼主。○廿二日宿所。○廿三日宿所。

八月

初日夢中。○七日御白殿。一月船。○十一月  
村主。○二日界天御主。○四日少府天御主。○越前

穀斐氣は文奈。○六日御白殿。一月船。○十一月  
御白ハ櫛奈。○七日御白。○八日御白。○九日御白。  
外主。○十日御白。○十一日御白。○十二日御白。○十三日  
御白。○十四日御白。○十五日御白。○十六日御白。○十七日  
御白。○廿二日御白。○廿四日御白。○廿五日御白。○廿六日  
御白。○廿七日御白。○廿八日御白。○廿九日御白。○三十日

九月

官。御白。○十一月御白。○八日御白。○九日御白。○  
十日御白。○十一月御白。○十二日御白。○十三日御白。○  
十四日御白。○十五日御白。○十六日御白。○十七日御白。○  
十八日御白。○十九日御白。○二十日御白。○廿一日御白。○廿二日御白。○廿三日御白。○廿四日御白。○廿五日御白。○廿六日御白。○廿七日御白。○廿八日御白。○廿九日御白。○三十日御白。

大は定後之參 五條天弔參 阿波の文參 依豆五条之納  
○十一日 佐勢主帮 岩高<sup>アカ</sup>と佐勢御被舍○十二日  
左秦參○十三日 尾川參○十五日 宮倉參 粟田<sup>スリタ</sup>に參 仁多御  
作<sup>アハ</sup>三年<sup>ミツニ</sup>よ<sup>アハ</sup>作<sup>アハ</sup> い向<sup>アヒタ</sup>一<sup>ミツ</sup>參 大和小金參○十六日 東  
山<sup>アシマ</sup>御<sup>アシマ</sup> 五条參○十七日 挑列池田呂服漢<sup>ルフ</sup>參○廿<sup>ハチ</sup>日 東  
安藝<sup>アキ</sup>多知<sup>タチ</sup>參 作田參 建仁門<sup>カニンモン</sup>あ夷參 聖高<sup>セイコ</sup>文參 碓也<sup>ムカシ</sup>  
の殿○廿<sup>ハチ</sup>日 大坂<sup>オサカ</sup>守磨<sup>モラ</sup>流<sup>アラシ</sup>參○廿<sup>ハチ</sup>日 大坂<sup>オサカ</sup>國<sup>クニ</sup>林參  
本城參 沼津<sup>ウツ</sup>參 麻若參<sup>アマガサ</sup>引連<sup>アヒタ</sup>參○廿<sup>ハチ</sup>日 天國<sup>アメノクニ</sup>流滿<sup>アラシ</sup>流<sup>アラシ</sup>  
田<sup>アヒタ</sup>參○廿<sup>ハチ</sup>日 大坂<sup>オサカ</sup>山<sup>サン</sup>參○廿<sup>ハチ</sup>日 挑列村參○廿<sup>ハチ</sup>日 池參 大和<sup>アサヒ</sup>  
五<sup>ゴ</sup>帝參○廿<sup>ハチ</sup>日 年<sup>イニ</sup>用防<sup>ヨウボウ</sup>參○廿<sup>ハチ</sup>日 伊藤參 五<sup>ゴ</sup>帝參

十月

八日 久保<sup>クボ</sup>參<sup>ハシモト</sup>○十日 久保<sup>クボ</sup>參<sup>ハシモト</sup>○十一日 久保<sup>クボ</sup>參<sup>ハシモト</sup>  
寺<sup>ハシモト</sup>○十一日 久保<sup>クボ</sup>參<sup>ハシモト</sup>○十二日 久保<sup>クボ</sup>參<sup>ハシモト</sup>○十三日 久保<sup>クボ</sup>參<sup>ハシモト</sup>○十四  
日 久保<sup>クボ</sup>參<sup>ハシモト</sup>○十五日 久保<sup>クボ</sup>參<sup>ハシモト</sup>○十六日 久保<sup>クボ</sup>參<sup>ハシモト</sup>○十七日 久保<sup>クボ</sup>參<sup>ハシモト</sup>  
大能<sup>オノ</sup>商<sup>ヤマ</sup>人<sup>ヒト</sup>夷<sup>イ</sup>參<sup>ハシモト</sup>○十八日 久保<sup>クボ</sup>參<sup>ハシモト</sup>○十九日 久保<sup>クボ</sup>參<sup>ハシモト</sup>  
喜<sup>ハシモト</sup>○二十日 久保<sup>クボ</sup>參<sup>ハシモト</sup>○廿<sup>ハチ</sup>日 久保<sup>クボ</sup>參<sup>ハシモト</sup>○廿<sup>ハチ</sup>日 久保<sup>クボ</sup>參<sup>ハシモト</sup>

十一月

十二月

十五日ハ懶安居所○廿二日左庵寺へ天室の十九日廿五  
桂巖山佛名徳○晦日紙菴をうりけをあつま左庵所  
乃弟子○弟がふ徳秀翁吉田家  
ば少圖の大妻左庵子の多也くえとおもむく  
並就彦使代智加えの呂中仲

ひくの

和漢事始

皆貞享五年戊辰三月上灘雒陽書肆日新堂壽梓

貝原先生編輯目錄

醉墨斋藏版

日本歲時記

日本釈名

續名數

日用良方

鄙事記

同後扁

初學知要

和爾雅

初學詩法

和字解

和漢事始

千字類合

書林

大坂

村上清三郎

京都

小川太龍衛門

江戸賣所同

彦九郎

